

# 校則の見直しを行うために必要な視点と課題

## A viewpoint and problem to perform a review of school regulations

環境教育学科 二川 正浩

### 1. 問題の所在と研究の目的

生徒指導提要では、校則を「学校が教育目的を実現していく過程において、児童生徒が遵守すべき学習上、生活上の規律」と定義しているが<sup>1)</sup>、その校則をめぐるのは、2017年10月に大阪の府立高等学校の3年生がおこした裁判<sup>2)</sup>をきっかけに、合理的な範囲を逸脱している校則、いわゆるブラック校則の問題が広く社会に認知されることになった。また、その後に教育関係者らの有志が発足させた「ブラック校則をなくそう！ プロジェクト」が行った校則の見直しを求める署名活動やマスコミによる校則への問題提起などにより、合理的な説明ができない校則の見直しを求める世論も高まった<sup>3)</sup>。

そのような風潮を受けて、熊本市ではいち早く2020年度から校則・生徒指導のあり方の見直しを進め、市立学校における校則の見直しを2021年度から実施することを決定した<sup>4)</sup>。また、文部科学省においても2021年6月に教育委員会や学校の設置者等に「校則の見直し等に関する取組事例」を事務連絡して、「昨今の報道等においては、学校における校則の内容や校則に基づく指導に関し、一部の事案において、必要かつ合理的な範囲を逸脱しているのではないかといった旨の指摘」がなされていることを踏まえて、校則の見直し等に取り組むことを求めた<sup>5)</sup>。なお、「生徒指導提要」の改訂に向けて2021年7月7日に開かれた有識者会議の初会合でも、出席者から合理的な範囲を逸脱している校則の見直しを促進させるべきだとの指摘がなされた。

このように、合理的な範囲を逸脱している校則の問題が社会に広く認知されてから約3年半後、校則の見直しを各学校が行うことが求められる情勢となったが、本稿では大学生に対して以下の調査を行い、その見直しを行うための視点と課題について考察していきたいと考える。

- ・必要がないと思った校則と校則に関する指導の状況
- ・校則の見直しを話し合った経験と見直しを話し合う機会や場の必要性に関する意識
- ・校則を見直すための手順の問題点と見直しへの参加に関する意識
- ・服装、頭髮、化粧に関連する校則の必要性に関する意識

なお、調査は事前に成績には反映されないこと、また個人情報の取扱いについて周知したうえで、2021年7月に都内の私立女子大学において教職課程を履修中の大学3年生79名を対象に実施した。

### 2. 必要がないと思った校則と校則に関する指導の状況

#### (1) 必要がないと思った校則

調査を行った大学生の多くは、いわゆるブラック校則の問題が広く社会に認知され始めた2017年から2018年頃に高等学校に在籍していたが、その大学生のうちで必要がないと思った校則が「あった」と回答した人数と割合は、小学校12名(15.2%)、中学校55名(69.6%)、そして高等学校48名(60.8%)であった。

その具体的な校則としては、小学校では以下のように文房具に関する校則が9名と最も多かった。その内、最も回答が多かったシャープペンシルについては、鉛筆による硬筆の指導という合理性を大学の授業で説明しているが、その説明に納得しない大学生は少なくない。

(文房具に関するきまり) (9名)

- ・シャープペンシルの使用禁止 (4名) ・箱形の筆箱でなければいけないこと (2名)
- ・キャラクターの鉛筆、ペンケースの使用禁止 (1名) ・色ペンは3色まで (1名)
- ・ボールペンの使用禁止 (1名)

(その他)

- ・寒い日でもほとんどが半ズボンで過ごすというきまり (1名) ・帽子に名前を書くこと (1名)
- ・ハンドクリームやリップクリームの持参は、連絡帳で連絡して担任の承認が必要 (1名)

また、中学校と高等学校では、回答の多かった順に校則を並べると以下ようになり、靴下と頭髮に関する校則がその多くを占めた。特に中学校では靴下の色や髪の色や髪型の指定など、「中学生にふさわしく、清潔感がある服装や髪型」と一般的に説明される校則への不満が多く見られた。

それに対して高等学校では、あったと回答した人数も若干少なく、必要がないと思った校則も中学校より分散しているが、髪留めゴムの色の指定やセーターやカーディガンの着用規定、化粧の禁止など、個性や自由、おしゃれに関する校則への不満が中学校よりも多く見られた。

校則	中学校 (55/79名)	高等学校 (48/79名)
靴下 (40)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色は白 (17)</li> <li>・くるぶしソックスの禁止 (7)</li> <li>・長さの制限 (2)</li> <li>・ラインやワンポイントの制限 (2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色の指定 (4)</li> <li>・くるぶしソックスの禁止 (2)</li> <li>・ラインやワンポイントの制限 (2)</li> <li>・靴下の指定 (2) ・長さの制限 (1)</li> <li>・ラインやワンポイントの禁止 (1)</li> </ul>
頭髮等 (32)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・髪の色や髪型 (13)</li> <li>※前髪は眉上、肩より長いと結ぶ (各3)</li> <li>・染色の禁止 (1) ・地毛証明 (1)</li> <li>・髪留めゴムの色の指定 (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・髪の色や髪型 (7) ※前髪は眉上 (3)</li> <li>・髪留めゴムの色の指定 (5)</li> <li>・地毛が茶色でも黒染めをする (2)</li> <li>・染色の禁止 (1) ・地毛証明 (1)</li> </ul>
下着等 (9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下着は白 (6)</li> <li>・ストッキングは肌色のみ (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・派手な下着は禁止 (1)</li> <li>・冬のタイツのデニール規定 (1)</li> </ul>
セーター等 (9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セーターで廊下に出ることが禁止 (1)</li> <li>・セーターを着るならブレザーを着用 (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セーターを着るならブレザーを着用 (2)</li> <li>・セーターやカーディガンの色指定 (2)</li> <li>・カーディガンの指定 (1)</li> <li>・カーディガンの着用禁止 (1)</li> <li>・トレーナーはワンポイントのみ (1)</li> </ul>
鞆 (9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鞆の指定 (2) ・リュック禁止 (1)</li> <li>・カバンにキーホルダーは一つ (1)</li> <li>・一年時のリュックは黒 (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鞆 (スクールバック) の指定 (3)</li> <li>・リュック禁止 (1)</li> </ul>
靴 (8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色は白色 (5) ・靴の指定 (3)</li> </ul>	
スカート (7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スカートの丈は膝下 (3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スカートの丈は膝下 (4)</li> </ul>
化粧等 (6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・眉毛の手入れの禁止 (3)</li> <li>・化粧の禁止 (1) ・アイプチの禁止 (1)</li> <li>・色つきのリップクリームの使用禁止 (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・化粧の禁止 (5)</li> <li>・眉毛の手入れの禁止 (1)</li> </ul>
制服の着用 (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャージ登校の禁止 (2)</li> <li>・ズボンの着用禁止 (1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制服以外での登下校禁止 (1)</li> <li>・ジャージ登校の禁止 (1)</li> </ul>

携帯・スマホ(4)	・携帯電話の持ち込み禁止(1)	・校内での使用の禁止(2) ・携帯電話の持ち込み禁止(1) ・携帯電話の使用は登下校を含めて禁止(1)
シャツ(1)	・ワイシャツの第1ボタンを留める(1)	
ブレザー(1)	・冬季は教室の外でブレザー着用(1)	
膝掛け(1)	・膝掛けの禁止(1)	
その他	・傘立ての使用禁止(2) ・自転車通学の禁止(1) ・置き勉禁止(1) ・保護者同伴であっても制服のままコンビニやレストランに行ってはいけない(1)	

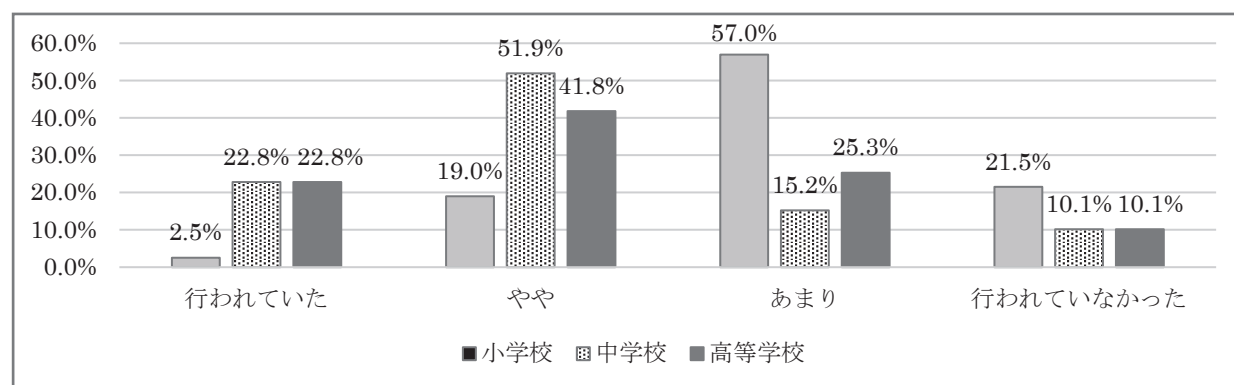
※( )の数字は人数で、下線部は5名以上の回答があった校則

このように、あったと回答した割合は高等学校に限ると60.8%となるが、一方で39.2%は校則に不満を持っていかなかったとも言える。また、通称「黒染め裁判」の争点となった「地毛が茶色でも黒染めをする」をあげた大学生は2名であった。しかしながら、判決では華美な頭髪を制限することで生徒に学習や運動に注力させ、非行防止につなげるという目的などから適法と判断されており、その判決を踏まえると黒染めを含めて大学生があげた上記の校則は全て合理的な範囲を逸脱しているとは言い難い。

ただし、中学校と高等学校では半数以上の大学生が「あった」と回答している現状、そして個性や自由、おしなれを規制する校則への不満が多いという調査結果からは、学校段階や学校の状況にもよるが、勉学に集中させることや非行防止などの観点に基づく合理性を児童生徒に納得させるために根気強く、より説得性をもって指導を行う必要がある。

## (2) 校則に関する指導の状況

文部科学省「校則の見直し等に関する取組事例」では、生徒指導提要から引用して「教員がいたずらに規則にとらわれて、規則を守らせることのみの指導になっていないか注意を払う必要」があると述べている。その内容を受けて、そのような指導が行われていたかどうかについて調査したが、その結果は以下の通りである。



グラフ1 規則にとらわれて、規則を守らせることのみの指導が行われていたと感じた割合

このように、そのような指導が行われていた、やや行われていたと感じた大学生の割合は小学校21.5%、中学校74.7%、高等学校64.6%となっており、最も多かった中学校では小学校にくらべて回答者が約3.5倍となっている。この点については、必要性がないと思った校則についても小学校と中学校とでは回答数に乖離があり、校則の見直しにおいては中1ギャップの問題も踏まえて小学校と中学校との整

合性が求められる。

また、小学校で4名、中学校で15名、そして高等学校で19名の大学生が納得できなかった指導があったと回答している。以下はそのうちの高等学校での事例であるが、理由を集約すると指導の公平感や一貫性の欠如、個人情報や人権に関わる指導方法の問題、指導方法自体の問題、合理性のない校則の強要の4つに分類される。

(指導の公平感や一貫性の欠如)

- ・私の学年のみ、セーターを肩や腰に巻いていると没収された。
- ・男女一緒に下校すると指導を受けるが、交際している生徒がいても黙認する教師とそうでない教師がいる。
- ・カーディガンの色で、先生によって異なる指導をしていたこと。
- ・ピアスを付けていて怒られる人と怒られない人がいて、不平等な指導がされていた。
- ・校則には黒の髪留めと記載されていたので、黒のプラスチック製の髪留めを使用していたところ、黒のゴムにしろと注意されたので、生徒手帳をもってこれは黒の髪留めですと反論したところ、次の年から黒のゴムのみに変わっていた。

(個人情報や人権に関わる指導方法の問題)

- ・SNSツール使用の発覚による校内放送での呼び出し。今は普及しているラインやラインでのクラスグループ作成も望ましくないとされていた。
- ・ツーブロックの髪型をした人は指導され次第、即時髪の毛を切り、髪型をかえなければならない。
- ・水泳をしているため炎暑で髪の毛が茶色くなっている男子を信じずに生活指導の先生が叱っていたこと。

(指導方法自体の問題)

- ・球技大会や体育祭の時もスマートフォンが許されず、スマホチェック係の先生が二人組で各クラスをわざわざ見回りに来たときは厳しすぎると感じた。その見回りで捕まる子は多く、反省文を書かされていました。
- ・メイクの確認を昇降口で行い、発覚次第、その場でそれを落とすこと。
- ・ルールを守るために、生徒に個性は必要ないという指導。
- ・セーターやカーディガン、トレーナーの上にブレザーを着ていなかった場合、没収されて卒業まで返却されなかった。
- ・頭髪検査において、ドライヤーで髪が傷んで筋が出ているなど、染めた髪以外の指導をしていた。

(合理性のない校則の強要)

- ・地毛も含めて髪色が黒でなければ、美容室での黒染めを求められる。

それらの記述は卒業後も心に残り続けた負の記憶と言えるが、回答の多かった中学校と高等学校の教員は「児童生徒の内面的な自覚を促し、校則を自分のものとしてとらえ、自主的に守るように指導を行っていくことが重要」であることを認識して、校則に関する指導を行う必要がある。

なお、あわせて調査した「校則等をめぐる問題で学校に行きたくないと思った」ことがあるかについては、8名（小学校の時が2名、中学校の時が5名、そして高等学校の時が3名）の大学生があると回答した<sup>6)</sup>。実際に不登校になったと回答した大学生はいなかったものの、「規則にとらわれて、規則を守らせることのみの指導」ではなく「一人一人の児童生徒に応じて適切な指導を行う」ことの重要性も教員は認識する必要がある。

### 3. 校則の見直しを話し合った経験と見直しを話し合う機会や場の必要性に関する意識

#### (1) 校則の見直しを話し合った経験

文部科学省「校則の見直し等に関する取組事例」では、生徒指導提要より引用して、校則の内容の見直しについて「児童生徒が話し合う機会を設けたり、PTAにアンケートをしたりするなど、児童生徒や保護者が何らかの形で参加する例もある」と述べている。その内容を受けて「校則の見直しについて話し合う機会や場があったか」について調査したが、その結果は以下の通りである。

- ・小学校7名（学級活動1名、児童会活動4名、投書箱1名、アンケート1名）
- ・中学校37名（学級活動3名、生徒会活動29名、投書箱10名、アンケート12名、その他1名）
- ・高等学校47名（ホームルーム活動4名、生徒会活動42名、投書箱12名、アンケート12名、その他1名）

このように、中学校では46.8%、高等学校では59.5%の大学生が機会や場があったと回答しており、その具体的な機会や場としては小学校から高等学校までを通して、児童会活動と生徒会活動が最も多くなっている。

ただし、話しあった結果、校則が見直されたと回答した大学生は小学校で0名、中学校で5名、そして高等学校で15名となっており、その結果、「自分たちが話し合っても、結局、校則は変わらない」という意識を育ててしまうことがないように十分配慮する必要がある。

一方、それらの見直しが生徒の多数決によって行われたと回答した大学生は中学校で4名、高等学校で14名となった。その多数決は「校則の内容の見直しは、最終的には教育に責任を負う校長の権限」との理解の上で、校長が慎重に判断したと想定されるが、多数決の結果を校則の見直しにどのように取り入れていくのかについて、その手順や過程を整理しながら学校全体としての合意形成を図る必要がある。

なお、高等学校において生徒の話し合いによって見直された校則は以下の通りで、靴下に関する校則の見直しが最も多くなっている。

#### （靴下に関する校則）（5名）

- ・靴下の色（2名）
- ・高3の時に指定の靴下は正装時のみに変わった（1名）
- ・冬場でも指定のひざ丈の靴下しか履くことができなかったが、見直し後はタイツが許可された（1名）。
- ・夏に短い靴下を履いてよくなった（1名）

#### （制服に関する校則）（4名）

- ・冬用と夏用の制服の移行期間が長くなった（1名）
- ・カーディガン着用が可能になった（1名）
- ・女子の夏用のベストを着用する際に長袖シャツの着用可、夏はシャツの第一ボタンは開けても可、リボン・ネクタイの着用は任意に（1名）
- ・雨で制服が濡れた場合はジャージの着用可、制服を持参であれば自転車通学者のみジャージ登校可（1名）。

#### （体育の授業に関する校則）（2名）

- ・体育着の規定（1名）
- ・体育の時間に日焼け止めを使用しても良い（1名）

#### （携帯電話・スマートフォンに関する校則）（2名）

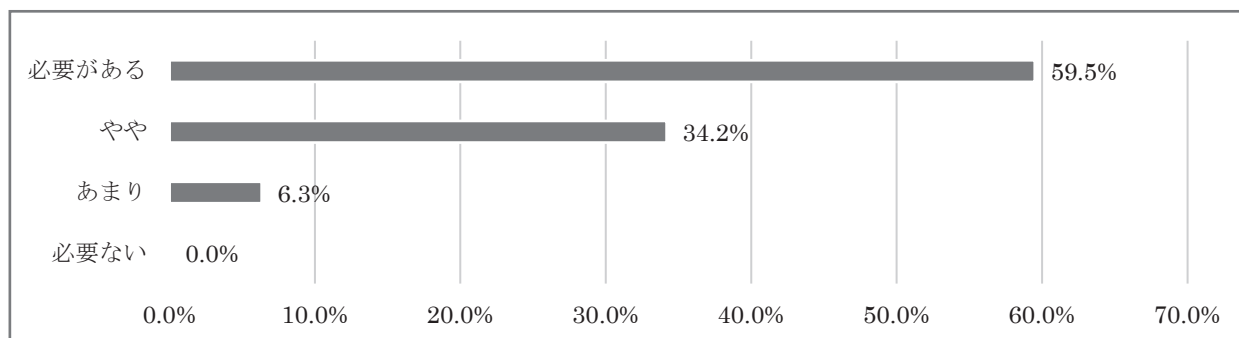
- ・朝のSHR前と昼休み、帰りのSHR後の使用が許可された（1名）
- ・携帯電話の持ち込み可（1名）

#### （昼食に関する校則）（1名）

- ・昼休みの外出禁止のままであるが、購買が導入されて昼食を忘れた生徒に救済が用意された（1名）

## (2) 校則の見直しを話し合う機会や場の必要性に関する意識

文部科学省「校則の見直し等に関する取組事例」では、生徒指導提要より引用して「校則の見直しは、児童生徒の校則に対する理解を深め、校則を自分たちのものとして守っていかうとする態度を養うことにもつながり、児童生徒の主体性を培う機会にもなります。」と述べている。その内容を受けて「校則の見直しについて、児童生徒が話し合う機会は必要かどうか」について調査したが、その結果は以下の通りである。



グラフ2 校則の見直しについて、児童生徒が話し合う機会は必要かどうかの割合

このように、必要がある、やや必要があると回答した大学生は全体の93.7%にのぼる。その理由を集約すると、文部科学省「校則の見直し等に関する取組事例」に示された「校則に対する理解を深める」、「自分たちのものとして守っていかうとする」、「主体性を培う」と同義の理由をあげた大学生が39名で最も多かった。また、生徒指導提要では時代の進展などを踏まえたものになるように絶えず積極的に見直すことを求めているが、12名の大学生が同様の理由をあげている。

一方、校則を守る立場の児童生徒の意見や不便さなどを聞く必要があると回答した大学生が23名いるが、校則は「児童生徒が健全な学校生活を過ごし、よりよく成長していくための行動の指針」であるとともに、「学校は、生徒にとって伸び伸びと過ごせる楽しい場でなければならない。」<sup>7)</sup>ことを踏まえ、校長や教員は校則の見直しにあたって児童生徒の意見に真摯に耳を傾ける必要がある。

(「校則の見直し等に関する取組事例」に示された意義と同様の回答) (39名)

- ・校則に対する理解を深めることができるから (12名)
- ・主体性を培う機会となるから (6名)
- ・校則を自分たちのものとして守っていかうとする態度を養うことができるから (6名)
- ・自分たちの学校生活をよりよくしていこうという意識の育成につながるから (15名)

(時代の進展などを踏まえて見直す必要があるから) (12名)

(校則を守る立場の児童生徒の意見や不便さなどを聞く必要があるから) (23名)

- ・校則を守る立場の生徒の意見を聞く必要があるから (18名)
- ・生徒にしかわからない不便さがあるから (5名)

なお、必要ないと回答した大学生の理由は以下のとおりである。先に触れたが「自分たちが話し合っても、結局、校則は変わらない」という意識を育ててしまうことがないように留意する必要がある。

- ・話し合っても変わることはほぼないから (3名)
- ・校則は必要で変える必要はないから (2名)

## 4. 校則を見直すための手順の問題点と見直しへの参加に関する意識

熊本市では市立学校における校則の見直しを2021年度から実施することは先に述べたが、熊本市では

その実施にあたって、次のように校則を見直すための手順を例示している<sup>8)</sup>。

- ①10月に全生徒と全保護者へアンケート
- ②11月にアンケート調査結果等を協議・検討
  - ※生徒会執行部（4名）、生徒会執行部以外（6名）、保護者（5名）、教師（5名）の20名で組織。
  - ※委員長はPTA会長、副委員長は生徒会長、教頭。
- ③提案内容について、委員の立場の代表者の過半数（生徒5、保護者3、教員3）を得た場合、校長へ提案
- ④学校（校長）が承認 ※校則等に反映

この手順は他の自治体や学校の参考となるが、ここではその手順で想定される次の3つの問題点を大学生に提示して、その問題点の捉え方について調査した。

- ・20名による協議・検討と校長の承認という手順について
- ・生徒会執行部以外の委員の選出について
- ・継続的に行う校則の見直しについて

まず、20名による協議・検討と校長の承認という手順については、問題があると回答した大学生は42名で、その理由は「委員の立場の代表者の過半数で決定することは全生徒の合意とは言えない」、「教員や保護者などの大人が反対すると否決される」の2つに集約された。また、校長の承認については、見直し案を校長が承認しなかった場合、生徒は納得するが4名、やや納得するが12名、あまり納得しないが35名、納得しないが28名という回答結果となった。

また、生徒会執行部以外の委員の選出については、委員にあまりなりたくない、なりたくないと回答した大学生は合わせて51名であった。その理由は以下の通りであるが、責任の重さや合意形成の難しさをあげた大学生が最も多く、合わせて33名となっている。

- （責任の重さ・合意形成の難しさ）
- ・責任が重いから（21名）
  - ・生徒全員の意見をまとめる自信がないから（7名）
  - ・他の生徒から文句を言われる、嫌われそうだから（5名）
- （話し合っても校則がかわらない）
- ・結局は校長や大人の意見が通ってしまいそうだから（5名）
- （その他）
- ・面倒、または大変そうだから（3名）
  - ・校則に不満を持ったことがないから（3名）
  - ・例示された見直しの方法に問題があるから（1名）
  - ・毎年続けると、あまり真面目に取り組まないと思うから（1名）

そして、継続的に行う校則の見直しについては、問題があると回答した大学生は3名のみであったが、その理由は以下の通りで、概ね想定される問題点を指摘していると言える。

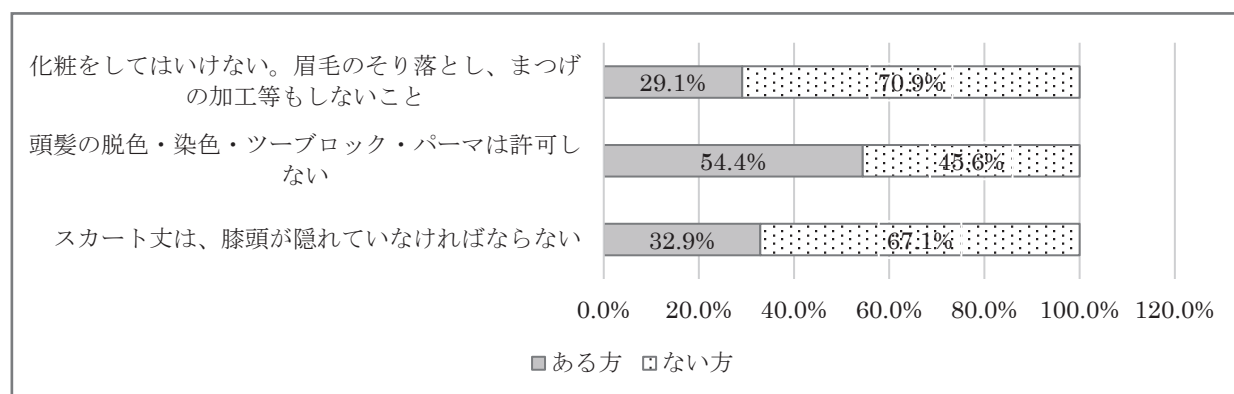
- ・校則が目まぐるしく変わり、生徒は不平等と感じると思うし、生徒の用意しなければならない日用品（例えば靴下）も変化する可能性があるため。
- ・もし毎年校則が改定されていたら、余計な混乱を招く可能性があると考えたから。また、毎年行くと校則の意義が薄れ、見直しの質が下がってしまうと考えたから。
- ・毎年行うことで、よりより校則が生徒の意見から生まれるかもしれないが、一方で去年と今年の校則を見直した場合で混乱を招く。

以上の問題点については、熊本市が例示した校則の見直しの手順に限ったものではなく、手順のモデルとなった中学校では既に解決されていると思われるが、これから校則の見直しの手順を策定していく学校においては、手順自体も児童生徒の意見を聞きながら慎重に検討し、校長と教職員、そして児童生徒との共通理解と合意形成を図ることが求められる。ただし、その際には「校則の内容の見直しは、最終的には教育に責任を負う校長の権限」であることを児童生徒に十分に理解させておく必要がある。

なお、この取り組みによって校則を守っていこうとする意識や態度を養うことができるかとの問いについては、思うが30名、やや思うが48名、あまり思わないが1名で、思わないと回答した大学生はいなかった。このように熊本市のこの試みは大学生からは概ね評価されていると言える。

## 5. 服装、頭髪、化粧に関連する校則の必要性に関する意識

調査を行った大学生は全員が女子で、先に示したように服装や頭髪に関する校則への不満が多かったが、それに化粧に関する校則を加えて、高等学校の段階で次のような校則があった方がよいかどうかについて調査した。その調査結果は以下の通りである。

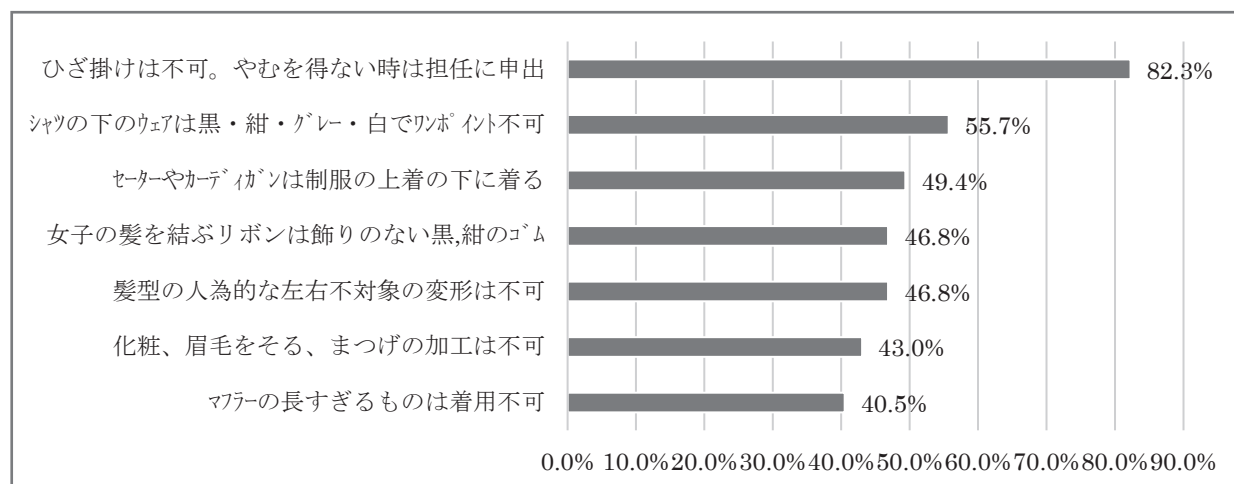


グラフ3 化粧、頭髪、スカート丈に関連する校則の必要性に関する意識の割合

このように、ない方がよいと回答した割合がもっとも高かったのは化粧に関する校則で、70.9%の学生が「ない方がよい」と回答している。ただし、先の「必要はないと思った校則」の調査で化粧の禁止をあげたのは3名にすぎず、質問の仕方で回答した人数に大きな違いがみられた。

その点については、在学していた高等学校の校則で化粧が許可されているという可能性もあるが、予想としてはこの調査が一つ一つの校則をあげて「必要か不要か」と質問したためと考えられる。すなわち、グラフ4はある高等学校の服装、頭髪、化粧に関連する校則を抜き出して、それらの校則が「合理的な範囲を逸脱」しているかどうかを調査した結果であるが、例えば「逸脱している」と回答した割合が最も高かった膝掛けに関する校則については、「必要ないと思った校則」の調査で回答した大学生はいなかった<sup>9)</sup>。

従って、仮に全ての一つ一つの校則を見直す際には、校長と教職員はその理由を共通理解し、児童生徒に納得できる合理性を説明する必要がある。



グラフ4 合理的な範囲を逸脱していると回答した割合

なお、化粧に関する校則が合理的な範囲を逸脱していると回答した大学生の理由を集約すると、「卒業後、社会に出てから必要となるため」が最も多くて15名、次に「コンプレックスなどを隠したりするため」が11名となっている。以下はそれらの抜粋であるが、校則の見直しでは「校則を守る立場の児童生徒の意見や不便さを聞く必要がある」(23名)との調査結果を踏まえて、どこまでを聞き入れるかは校長の判断としても対話を通してその理由や不便さに耳を傾ける必要がある。

#### 【卒業後、社会に出てから必要となるため】

- ・化粧は高等学校を卒業してすぐに働き始める人もいるため、限度を定めての校則があれば十分である。
- ・化粧は高等学校生まではしてはいけないのに、社会に出た途端にある程度の化粧をすることが礼儀となるため、学校で学んだり、高等学校生生活に取り入れたりすることが必要だと思う。
- ・大学生や社会人になって化粧をするのは当然という感じなのに高等学校で禁止になる理由がわからない。自分の高等学校では化粧が禁止されていたのでやらなかったが、大大学生になって化粧のやり方が分からずに困った。

#### 【コンプレックスなどを隠したりするため】

- ・化粧や髪型・髪色を変えることで自分のコンプレックスを隠したり、人前に出る上で恥ずかしくないように身なりを整えたいから
- ・高等学校の年齢になれば自分の髪の色や質、顔にコンプレックスを持つ人は増えるのではないかと思います。そのような生徒の不安な気持ちに寄り添うためにも頭髪の脱色・染色また化粧などの校則はない方が良く考えます。
- ・化粧もある程度コンプレックス(ほくろやクマなど)を隠す手間であれば良いのではないかと思います。
- ・化粧は生まれつきのあざやコンプレックス等を隠したりするための手段としての活用が考えられるから。
- ・眉毛が濃くて多少剃らなければ恥ずかしいと感じる人がいると思うため。

ただし、それらの生徒の声が全てではなく、以下のように校則をめぐっては個々の様々な考えや価値観があり、校則の見直しはその多様性を認めながらも慎重に合意形成を図っていく必要がある。

	校則は必要	校則は必要ない
全般	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強の妨げ、または勉学に必要なから（5名）</li> <li>・清潔感や統一感を保つため（4名）</li> <li>・生徒間での比較や格差を生むから（3名）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強や生活の妨げにはならないから（8名）</li> <li>・個性や自由を尊重した方が良いから（6名）</li> <li>・自分で判断して行動できるから（3名）</li> <li>・コンプレックスなどを隠すため（2名）</li> <li>・校則が厳しいと反発が大きくなるから（2名）</li> <li>・他人に迷惑をかけるわけではないから（1名）</li> <li>・社会に出た時、恥ずかしくないため（1名）</li> </ul>
スカートの丈	<ul style="list-style-type: none"> <li>・性犯罪に巻き込まれないため（7名）</li> <li>・下着が見えないようにするため（1名）</li> <li>・高等学校生としての品をたもつため（1名）</li> <li>・みんなに合わせるため（1名）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校則の必要性がわからないから（6名）</li> <li>※内、丈は膝頭より長くの規定が（4名）</li> <li>・性犯罪と無関係、または自己責任だから（2名）</li> <li>・指導による教員と生徒の負担軽減のため（2名）</li> <li>・成長によって膝が出てしまうから（2名）</li> <li>・下着が見えることはないから（1名）</li> <li>・学習や生活の妨げにはならないから（1名）</li> </ul>
化粧・頭髮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・清潔感や統一感を保つため（5名）</li> <li>・経済的な負担を避けるため（3名）</li> <li>・勉強の妨げ、または勉学に必要なから（3名）</li> <li>・生徒間での比較や格差を生むから（2名）</li> <li>・肌や髪を痛めるから（2名）</li> <li>・トラブルに巻き込まれないため（1名）</li> <li>・化粧をしないとおかしいという考えになる（1名）</li> <li>・手洗い場が混雑するから（1名）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業後、社会に出てから必要となるから（15名）</li> <li>・コンプレックスなどを隠したりするため（11名）</li> <li>・清潔感を保つために必要だから（6名）</li> <li>※内、眉毛は5</li> <li>・合理的な理由がないから（2名）</li> </ul>

## 研究の小括

以上、大学生への校則に関する意識調査を基に校則の見直しを行うための視点と課題について考察してきたが、そのなかで特に求められる視点と課題としては以下の4つがあげられる。

- ・校則の見直しは、法的な合理性と児童生徒の個性・感性を総合的に判断して行う必要がある。
- ・校則の見直しは、校長がその必要性を説明できかどうか判断して行う必要がある。
- ・校則の見直しの手順は、問題点を予想しながら児童生徒と保護者を含めた合意形成により作成する必要がある。
- ・校則の見直しの話し合いでは、児童生徒が安心して自分の意見を述べることができる環境をつくる必要がある。

その上で、熊本市では各学校で見直す校則の基準として①生まれ持った性質に対して許可が必要な規定、②男女の区別により、性の多様性を尊重できていない規定、③健康上の問題を生じさせる恐れのある規定をあげているが、公立学校においては校長の責任や負担の軽減、そして同じ自治体の学校間の差をなくす意味も含めて、熊本市のような自治体（教育委員会）レベルでの校則の見直しの推進が望まれる。

なお、全日本中学校長会・全国高等学校長協会「日常の生徒指導の在り方に関する調査研究報告」（1991年3月20日）<sup>10)</sup>では、校則見直しの推進の視点として次の5つをあげている。

- (1) 校則内容の見直しは、継続して取り組むことが大切である。
- (2) 思い切った見直しが必要である。
- (3) 生徒が主体的に考えるよう指導することが大切である。
- (4) 学校は家庭や地域との信頼関係を作るとともに、開かれた学校づくりをめざすことが大切である。
- (5) 人間味のある温かい生徒指導を基本に教職員の共通理解、共同実践が必要である。

この報告書が出されたのは30年前であるが、そこに示された内容は現在に通じるものが多い。「開かれた教育課程」が学習要領の前文に掲げられ、「開かれた学校」も以前から推進されるなかで、依然として閉鎖的で保守的と言われる学校にかわる新たな学校観をつくりあげるきっかけの一つとして、校則の見直しに期待したい。

## 注

- 1) 文部科学省『生徒指導提要』（平成22年3月）p.205より引用。なお、同書では校則について定める法令の規定は特にないが、校則を制定する権限は、学校運営の責任者である校長にあるとしている。
- 2) 大阪府羽曳野市の府立懐風館高等学校に通っていた女性が、大阪府に約220万円の慰謝料などを求めて大阪地方裁判所に訴えた裁判。通称「黒染め裁判」と言われるが、2021年2月16日の判決で横田典子裁判長は髪の色を禁止した校則は学校の裁量の範囲内で、黒染めの強要はあったとはいえないと頭髪指導の妥当性を認めた。ただし、不登校後に名簿から女性の氏名を削除したことは著しく相当性を欠くと指摘し、大阪府に33万円の賠償を命じた。
- 3) 署名活動は公式Webサイトで2017年12月から2019年8月まで行われ、集まった60,334名分の署名は当時の文部科学大臣であった柴山昌彦に提出された。
- 4) 熊本市はホームページにおいて「校則・生徒指導のあり方の見直しについて」の趣旨や見直しのためのガイドラインを公開している。
- 5) 同事務連絡では、校則の内容の見直しは、最終的には教育に責任を負う校長の権限であることを踏まえたうえで、「児童生徒が話し合う機会を設けたり、PTAにアンケートをしたりするなど、児童生徒や保護者が何らかの形で参加する例もある」として、その見直しを求めている。
- 6) 文科省「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」（令和2年11月）によると、令和元年に学校のきまり等をめぐる問題が主となって不登校となった児童生徒は小学校596人、中学校1,462人であった。
- 7) 学習指導要領解説『総則編』p.95から抜粋。
- 8) 熊本市教育委員会「校則・生徒指導のあり方の見直しに関するガイドライン」（2021年3月）p.2より引用。
- 9) 広島県の各学校では校則をホームページで公開しているが、その内のある県立高等学校の校則を事例とした。なお、グラフでは「逸脱している」との回答が40%を超えた校則を抜き出したが、「スカート丈は膝頭が隠れる」は31.6%、「脱色、染髪」は20.3%であった。
- 10) 文部省「校則見直し状況等の調査結果について（通知）」（1991.4.10）の別添として示されている。

## 参考文献

- ・文部科学省『生徒指導提要』（平成22年3月）
- ・熊本市ホームページ「校則・生徒指導のあり方の見直しについて」（最終更新日：2021年7月14日）  
[https://www.city.kumamoto.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c\\_id=5&id=31344&class\\_set\\_id=2&class\\_id=324](https://www.city.kumamoto.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=31344&class_set_id=2&class_id=324)（最終閲覧2021.9.9）

- ・熊本市教育委員会「校則・生徒指導のあり方の見直しに関するガイドライン」(2021年3月)  
[https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c\\_id=5&id=31344&sub\\_id=2&flid=244918](https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=5&id=31344&sub_id=2&flid=244918) (最終閲覧2021.9.15)
- ・文部科学省「校則の見直し等に関する取組事例について」(令和3年6月8日)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1414737\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1414737_00004.htm) (最終閲覧2021.9.9)
- ・大津尚志『校則を考える』晃洋書房. 2021